

# 小田原史談

第9号 談会  
小田原史一丁目  
小田原市幸一丁目  
郷土文化館

## 現代 小田原大秘録(六)

石井富之助

また御茶の湯の時は先年御拝領の薄雲の御茶壺御台子金銀御紋ちらし、御茶の釜はあられ釜をかけて茶の湯を遊ばされた。格別の時は御家の重宝芦屋駒形の御釜をかけた。この芦屋駒形の御釜といものはおよそ日本で三つといわれ御釜で、道自公勢居の時御拝領になった御釜である折紙があり、その文にい

ある。何時でも千貫余の値打がある。此の釜の類は無打ということ、古田識部殿御所持の名物である。其の以後名屋宗君方に遣い物とした。宗君方にあった後は大黒屋長左衛門に引出物として遣し長左衛門家に代々伝った駒形釜はこれである。口鏝掛底は織部殿の御好みで弥右衛門浄味が仰せを受けてこれを作った。

目は今の金高にして一万六千面ほどになる由、その外利久の茶杓、珊瑚の御茶壺満月の御茶入など数えるにいとまのないほどであったしたがってこの芦屋駒形の御釜は平常は御使用にならなかったといふことであるこれはさておき、此の前酒井伴六を御召しになつて弓の御稽古をなさつておられる時「引目に虫の養という字を書いてあるのは一体どういふ訳があるのか」と御聞きになった。

十二月十二日 御釜屋 弥五郎 政 啓

田口宗壽様

このように稀代の御釜なので御茶湯道具第一の御宝物とされていた。およそ貫

あるのは、鏡の四方に目をくって、これを養の目に形どつたからで、これによつ

て養目と称するのであります。養は陰物の祖であつて月中に〇する。

常にうまいので、江戸中の者どもが聞きつたえて、入りかわり立ちかわり射つてみたが、誰あつて射当てる者がない。天井が低く、これに当るよう仕掛けてあるからである。

しかし、かたい物に向つても弱弓よりもまさるでしよう」

- 一、口五寸四分
- 一、胸九寸
- 一、貫付真鬼面
- 一、駒の絵五疋これあり

田口宗壽様

政 啓

伴六は答えて

「それ引目鏡という名の

「即時に射殺すがいかに御尤なこと、猿屋は殺さないませ」

後にかの強弓をひく人が来てこれを見て大に感心し「武術というものは全く修業が第一である。しかしこれほどの者は江戸中には居ない。小田原の家中に酒井伴六という者がよく弓をひくと聞いているがさだめしその人であろう」と言つた。

金は付けるに及ばぬもので

の御茶湯道具第一の御宝物とされていた。およそ貫

あるのは、鏡の四方に目をくって、これを養の目に形どつたからで、これによつ

て養目と称するのであります。養は陰物の祖であつて月中に〇する。

常にうまいので、江戸中の者どもが聞きつたえて、入りかわり立ちかわり射つてみたが、誰あつて射当てる者がない。天井が低く、これに当るよう仕掛けてあるからである。

しかし、かたい物に向つても弱弓よりもまさるでしよう」

金は付けるに及ばぬもので

の御茶湯道具第一の御宝物とされていた。およそ貫

あるのは、鏡の四方に目をくって、これを養の目に形どつたからで、これによつ

て養目と称するのであります。養は陰物の祖であつて月中に〇する。

常にうまいので、江戸中の者どもが聞きつたえて、入りかわり立ちかわり射つてみたが、誰あつて射当てる者がない。天井が低く、これに当るよう仕掛けてあるからである。

しかし、かたい物に向つても弱弓よりもまさるでしよう」

金は付けるに及ばぬもので

の御茶湯道具第一の御宝物とされていた。およそ貫

あるのは、鏡の四方に目をくって、これを養の目に形どつたからで、これによつ

て養目と称するのであります。養は陰物の祖であつて月中に〇する。

常にうまいので、江戸中の者どもが聞きつたえて、入りかわり立ちかわり射つてみたが、誰あつて射当てる者がない。天井が低く、これに当るよう仕掛けてあるからである。

しかし、かたい物に向つても弱弓よりもまさるでしよう」

### ○史談会史跡めぐり

清水専吉郎

花朔日老若まじり史跡とう

長興山の志だれ彼に

小田原の街をひと目に見は

るかす

一夜城址は昔ぞ深し

天正のものまのあたり早雲

寺

湯けむり近きみちの賑はい

○五月所見

むらさきの花房つづく茶壺

御感の藤はここらうつりて

五月雨まもなく晴れてみど

り濃し

城の若葉のひかり目にしむ

松風のおと宛めんと裏の山

めぐりてむなし童沢禪寺

# 国府海の開発と

## 山崎金五右衛門

内田武雄

今小田原市下曾我の脳病院を中心し其の附近一帯を「こうみ」と呼んでいる。

昔北条氏の治世中は曾我山から落下する多くの溪流が此のところにあつまり、声のしげる湖で鴨、雁が繁息していたので、小田原藩北条氏は鶴の嘴を立てて番人を派遣していた、其頃の曾我は其の土人の行業の地で剣沢には滝があり、春ともなれば藤、山吹の花が咲きみだれ、夏ともなれば、このみみの声のしげつてい

大久保忠真の時代大久保侯は二宮尊徳翁を村民より引挙げて領内の整理をなされた頃、天保七年尊徳翁はその門人なる藩士山崎金五衛門をして「こうみ」の開発に従事せしめた。山崎氏は中央に深渠を穿ち附近の水をこれに集めて剣沢川に合して国府津の海に注ぎ完全な水田に改造した、其の竣工刻した碑が小田原市千代の三嶋神社の境内に建てられてある。その表面には「水雨天」と刻し、左面の碑文は、相州曾我谷津、別所、原、岸、千代、五カ村ノ高二千三百石余の内宇小海耕地と唱へ反別八町歩余ノ所水腐リタルコト深キハ丈ヲ越エ浅キハ尺ニ及ブ、往古ヨリ美ノリノ無キ所多キ故里民患ニヨリテ地埋ヲ考ヘ、千代村分ノ地ヲ掘ルコト、三百間余、天保丁酉ノ春、業ヲ初メ、初夏ニ至リテ悪水ヲ注ぎ終ニ乾熟ノ本田トナル今堤ノ上ニ神座ヲ設ケ四月八日ヲ以テ祭ル希クハ田地係リノ人々因恩ノ重キヲ思ヒ深キ恵ヲ後ノ世ニマデ忘ル事ナカレ、と刻してある碑文は千代村を掘る事三百余間とあるが今でもこの所に「水道」と言う地名がのこっています。

この開発には助卿と言つて近郷、近在の人々が集められ郷方役人の山崎さん是非常に嚴格の人で、この工事にあつた人々はたいへん泣かされたと言ふ事です。古老の話に、小海の開発をやる時に白と赤の元結であたまをゆわせ、帽けた者は何時までも赤元結組で働かなければならぬ、其方は早く白になれと励まされました。天保初年頃は益踊の盛んな時で、それで赤組が益踊をやる時に……

「ひるも 掛りに金五右衛門がなけりやよい」と謡つたという事です。其頃別所に徳坂関左衛門といふ人が「こうみ」に一反余の水田を持っていました。船で植え付をして取り入れのあらましを食われてしまつので、租税を出してはつ

高田、田島にも河原と云う地名がのこっているのでもあきらかではありません。約一千年前頃から地勢の変化によつて自然に埋もれたもの

のようである。度々起つた富士の噴火はこれらの川の流れに非常の影響を与えたものでしょう。天然変化人工作用によつて、今日のようになつたのですが、其の

まらぬので誰かもらつてくられる人はいないかと心がけていた。其頃他村から移住して来た小作百姓があつてどんな悪い田でも地持百姓になりたいたいという人があるのを見て酒一升を付けて嫁入らせたと言ふ話がある。其翌年に「こうみ」の開発が出来上つて其の田が良田となつて初めて自分の所有地から七八俵の新米を得たのでよろこんだ人があつたと言ふ。

山崎金五右衛門と言ふ人は延清の加藤さんの生れだとも言われている。小年頃より二宮翁に師事し治水土木に精通した人で農民より抜擢されて小田原藩士の列に入つた。累進して郷方見廻り役となり、小田原鍋島横町に邸宅を給せられた。全千代の三嶋神社境内にある水雨天碑は元は「こうみ」の堤の上に建ててあり、曾

我脳病院の敷地因に国府田という地名がのこっている千代中学校の裏にも国府田と言ふ所があります。国府の港が国府津であるので大昔高田の別堀附近が国府であつたのではなからうか、

富土の噴火はこれらの川の

の残雪、岸辺に数奇を尽した茶亭があつて、家臣関野源兵衛と云う人が鶴の番人をしてながらこの茶亭を保管していたが後に今の下曾我の岸の部落に土着して農民となつた。今岸の関野家は其の子孫である。領主はかつて小田原侯は幕府の老中として有名な

「こうみ」の地名に付いてはこの附近に昔国府があつたので「国府海」と書いたのではなからうか、今下曾

古松台上仰楼 双鏡雄姿院八州 五代栄華今似視 南風蕪処燕燈遊

題 天守閣 北村流霞

の流れに非常の影響を与えた

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

ののこつたのですが、其の

# 移り変わる風俗

## 小泉吉之助

今、世界的観光地箱根の玄関、小田原駅前立って行き交う人波を見る。

その人々の服装を見て、男は洋服一色、女も五彩の虹の様に千色万様の色と形で洋装でないものはない。

稀れに和服婦人を見るのは新婚の夢もさりやらぬ人目にはつかない花嫁かネオンの匂いする女性位のもの。戦争という時代の波にモンペ生活を転機として衣食住は

何の矛盾もなく欧米化へ移行してしまつた。

その新風潮に取り残された女性、その人種的体形に於いて、短髪と肥満と長胴による洋装に合わない五十才以上の老年層でしよう。

その中であつて、百年一日の如く変らないのが花嫁姿であります。然も結髪は例外で全くかつら島田に角隠くは、振袖衣裳に着飾る

のは、生涯に一度の結婚を更に美しくの外に、二度々写せない記念写真用の晴れ姿ではないでしょうか。

相手の花婿の五ツ紋付、

仙台平の袴姿は影も潜めてモーニング衣裳となつたのだから移り代わる風俗を残すこと絶好の記念写真かも知れません。

衣袋の変遷といへば、少年期(青年会入会前)が種(ふんどし)を使い始めたのが明治四十二、三年頃、パンツ使用が大正元年頃行きたり、男女とも用いる様になつたのは昭和も相当経

つてからであり、従つて娘盛りから以上は履を追つて普及せず、ノーパンズは決して恥かしいことではなかつたのです。

少年期の着物は全く木綿飛白(かすり)か袴縮ばかり、祝日には小倉の縞袴を

はいて行つたのは大正四、五年でもそうだった。日本風俗の袴は老若男女とも失

われる運命にあり、紋付着

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

物、羽織は冠婚葬祭用のア

な点については既に周知の事実であるが、庭園の造園学的な知識については充分な復原想定が行われていない。しかし山内各所には石

牛路・川畦・心潭・梅花径・忘機島・琵琶池・透天橋

など池川・島・石・植栽物に到るまで一々命名され且つその鷹崖(シヨウ)や

石標のあることからしても、全山を庭園として整備されて

いた事は疑うべくもない。特に開山鉄牛は隠元や

木庵に師事して邸内各地に七処開を堂為した傑僧で興

あつて、長山庭園も造園学的な時代の風潮を超えて独

特的構想に満ちている点は注目すべきである。

江戸初期の寺院庭園には平安朝よりの伝統を承けた

池泉廻遊式庭園と、今一つは例えば湯本早雲庭園に見

る如き傾斜地に石を打込んで須弥山を象つた室町風の

地方化したものが存在するけれども、長興山庭園の特長は遠景への眺望を本位

にしているにと、巨岩や滝川など点景物に大きな比重を

与えている点は特に印象深い。それは夢想園師が鎌倉の瑞泉寺庭園の背後の

尾根に龍界一覽亭を作つて

長興山はその規模の宏壮

である。もと郷土文化館主

事滝口伊将氏は、私のこの

些やかな興味に対して種々の助言を与えられたり、また文献を貸与されたりした。今

度同氏は清浄観八景について小文を草するよう命じられたので、誠に駄文を草して御礼の一斑に代えようと

思ふのである。

長興山はその規模の宏壮

である。もと郷土文化館主

事滝口伊将氏は、私のこの

些やかな興味に対して種々の助言を与えられたり、また文献を貸与されたりした。今

度同氏は清浄観八景について小文を草するよう命じられたので、誠に駄文を草して御礼の一斑に代えようと

思ふのである。

長興山はその規模の宏壮

である。もと郷土文化館主

事滝口伊将氏は、私のこの

些やかな興味に対して種々の助言を与えられたり、また文献を貸与されたりした。今

度同氏は清浄観八景について小文を草するよう命じられたので、誠に駄文を草して御礼の一斑に代えようと

思ふのである。

長興山はその規模の宏壮

である。もと郷土文化館主

事滝口伊将氏は、私のこの

庭園の岩石や池泉その他に命名する事も古くから行われていたが、室町時代禅僧が作庭を手がけてからはこの傾向は更に著るしくなる。京都大仙院庭園にも庭

石に不動石・臥人石・伏虎石・螺石などの名があつて

それらの命名を後の時代のものとする説もあるけれども、吾が長興山には鉄牛や

木庵の雷で石牛はじめ似たような多くの名があることを知れば、右は後会である

ても江戸初期以前既に一般に行われた風潮であることが知られる。

さて長興山の経営は寛文七年に起工して同十一年に竣工している。(一書に寛文九年とあるがそれは全部に就いてではない)鉄牛の師木庵は幕府の招聘に遭つて東上の途次ここへ立寄つて

いるが、それは寛文九年の事で清浄観八景の七絶をそれぞれに賦し、また川遊

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

# 清浄観八景のことども

## 田代道弥

私の小居は風祭の奥「寺谷」と云うところにあつたこの辺り古くは「石棚」と呼んだらしいことが新編風土記に見える。ここから長興山へは蜜柑山一つへだて

るばかりであるから、私は採集散策の折に犬をつれてこの遺蹟に登り、礎石や石

標の草がくくれるのを見ては往時の盛衰を思ふのが好き

である。もと郷土文化館主事滝口伊将氏は、私のこの些やかな興味に対して種々の助言を与えられたり、また文献を貸与されたりした。今

度同氏は清浄観八景について小文を草するよう命じられたので、誠に駄文を草して御礼の一斑に代えようと

思ふのである。

長興山はその規模の宏壮である。もと郷土文化館主事滝口伊将氏は、私のこの些やかな興味に対して種々の助言を与えられたり、また文献を貸与されたりした。今

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

を

の(シヨウ)や清浄観の扁額を題書しているから、そのころ工事は大いに進捗していた事が知られる。

清浄観は書院でその裏手に在ったろう泉水は今でも山上にその痕跡を留めている。往時この平坦地には更に大雄宝殿(仏殿)・心室堂(禪堂)・法喜堂(斎堂)・藏経・開山堂・鐘楼・天王殿(楼門)などがあつた。清浄観八景はここよりの遠望を季節と時間とを異にして八景を選んだものであ

# 紹太寺清浄観八景

## 積木庵

### 西嶺春花

一書に西嶺は蓮華峯(俗称丸山)かといひ、春花は杜鵑花ならむとあるが、私は西嶺を牛臥山から塔ノ峯に続く連山、春花はヤマザクラ・マメザクラなどの団々と咲く様とする。杜鵑花がカキツバタでなければホトトギスですれば秋の花である。以下全首の訓読は我流であり然も解しない箇所もある。宜しく教示を賜りたい。

三月和風通二海ヒカニ 十分春色満ツツ二人間ニヒトノマタ  
 天晴夕照照二林岳シノノケ 無数山花錦繡斑ナシバ  
 江島螺ケイ 江ノ島の遠望を青螺にたとえていう。  
 天仙曾束緑雲鬢 化作三青螺一秀二海灣ニシテリトウ

朝態暮容知三幾變一 風流日々對二山嶺一  
 川煙雨声  
 川煙は水飲場の沢と石牛沢との合流点の下。俗称三筋の滝。川崖木庵書の磨崖(シヨウ)がある。一書に川煙の「川」は三筋の意があらんと云う。

山房聚レ首話ニ幽情一 清画懸開ニ驟雨声一  
 座久興關人各数 出門笑見瀑流鳴  
 數峯遠山  
 大磯高麗山附近の丘陵の日出の景をいう。——(サイカイ) 高く急なさま。  
 太白東方雲霧開 尖々數朶削ニ——  
 是細着二丹青彩一 一幅画図展ニ海隈一  
 前街夕照

小田原城とその附近家並の夕べの炊煙を云う。  
 一氣一氣さかんさま 几筵一ひじかけと敷きものと  
 馬路晚炊烟々煙 家々ニ客各争レ先  
 一坡瑞氣半天日 交彩一罇上ニ几筵ニ  
 三浦滯帆  
 相模湾上の漁舟と三浦半島の遠望を云う。レン波のしずかに動くさま 下載一積荷を舟からおろすこと  
 水光一映ニ斜暈一 下載片舟何処帰ヨリカル  
 滿嶺風帆過レ眼急 御疑鷗鷺掠レ屋飛  
 東山秋月  
 石垣山に出たる秋の月を云う。桂カイ月の異称牛斗ノ間一ひと星と北斗星の間 寒老一みすばらしい老人 (セイ) 藝一よじのぼること  
 白雲飛尽一天間 桂隄徘徊牛斗間  
 得意深明寒老句 句清胸絶ニ一禁一  
 潮江雪浪  
 酒匂川河口の雪浪を云う。六出一雪の異称

風雷夜吼動ニ窓扉一 十里長浜崩ニ六出一  
 大雄山最乗寺  
 開運橋渡初  
 津田久紫  
 若楓台傘の朱に漏る薄日 くん風に僧衣がアカシ深山  
 杉  
 杉の秀五月曇りをさえ居り 藤房がライトにおどる夜の闇  
 衣更え体臭残る夜を丸め  
 行路五月雨七首  
 斐田生  
 さみたれに濡も流れて馬路に時をまち居る旅人の群れ さみたれに箱根八里は人たえて甘酒茶屋も店とさしあり  
 さみたれのふるのの真寂し けり会ひて  
 ゆきなやむなり箱根路の旅 時鳥鳴く音も聞きぬ五月雨の  
 はれままつの旅のやとりに 思はずとも旅のやとりも重なりぬ  
 ふる五月雨の晴れままつ 駿河路のバスに乗りつつ大

眺看潮声擊二海磯一 阿ホツツニトトナリ 一空白々巻還飛 (強羅公園箱根自然博物館)

井川  
 わたりとたえし昔しのびぬ 大井川わたりとたえしふることを  
 ききつつ渡る駿河路の旅  
 役員事務分掌  
 事務局 通信連絡 専任者執務  
 総務部 行企画 会員募集  
 財務部 会費徴収 編輯費検出  
 編輯部 編輯企画 原稿整理

第九号  
 昭和三七七年四月十五日発行 (毎月一回発行)  
 会費 一ヶ年三百六十円  
 発行人 小田原史談会  
 編纂人 機関紙発行委員会  
 発行所 小田原市幸一丁目 郷土文化館内  
 小田原史談会